山口県内の博物館紹介 vol. 17

野田学園ヒストリーミュージアム

今回は、埋蔵文化財が学校教育の場に活用されている好例をご紹介します。古くから山口市の中心部として栄えた大殿地区に、幼稚園・中学校・高等学校を運営する学校法人「野田学園」があります。学園は、室町時代の有力大名である大内氏が居館を構え、中世都市を形成した地域に立地しています。周囲には現在でも寺社を始めとする歴史的建造物が数多くが建ち並び、地下には 15 世紀から 16 世紀にかけての都市遺跡が眠るという抜群の歴史環境を有する学園の一角に、「野田学園ヒストリーミュージアム」が設けられたのは平成 20 年のこと。学園の牛見正彦理事長と村岡謙二主幹にミュージアムについてお話しをうかがいました。

（質問）学内で文化財資料展示を始めたきっかけを教えてください。
（回答）新校舎の建設に伴い、山口市教育委員会に建設予定地の発掘調査を行ってもらいました。これは本学園の生徒にとって絶好の教材と思い、調査中に度々遺跡の見学をさせてもらいました。調査終了後は遺跡で発見された遺構を保存し、そのままの状態で展示することも考えたのですが、やはり出土品を用いた方が歴史を分かりやすく学習できると思い、現在の展示となりました。
（質問）校舎のロビー、しかも柱に展示ケースを設置するというのは斬新なアイデアですね。
（回答）多くの生徒に見学してもらうには、やはり人が集う場所でなければなりません。具体的な展示方法については、発掘調査担当者とデザイナーに検討してもらいました。
（質問）生徒の反応はいかがですか。
（回答）皆、興味を持って見学しています。また、本学園の生徒だけでなく、毎月1回教室棟ロビーで開催する「ロビーコンサート」や、毎年秋に開催する「アートふる山口」では、一般の方にも施設開放をし、ミュージアムを見学していただいています。

ミュージアムでは、大内文化を楽しく具体的に学習できるよう、「まちのにぎわい」「国内外との交流」「大宴会がひらかれた」「大内氏から毛利氏へ」「発掘調査の DVD 上映」という5つの展示コーナーが設けられています。学校と博物館とが融合したユニークな展示会場に是非一度足をお運び下さい。

（横山成己）

野田学園教室棟 1 階ロビーに設けられた
野田学園ヒストリーミュージアム

吹き抜け階段の柱に設置された展示ケース

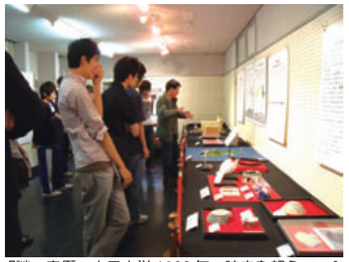
お問い合わせ先
学校法人　野田学園
〒753-0094
山口県山口市野田 56
TEL 083-922-5000

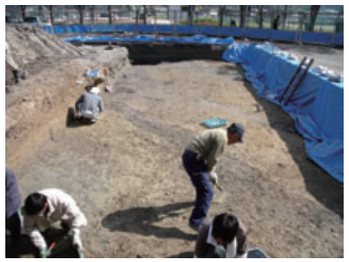
2009 年 春 埋蔵文化財資料館の活動

3月
3/20（火）～5/29（金）
第 27 回企画展『謎の官衙～山口大学 1200 年の時空を超えて～』を開催（於：埋蔵文化財資料館展示室）。入館者総数 413 名。
3/30（月）～4/1（水）
吉田構内大学会館西側正門等改修（道路）工事（吉田遺跡）で立会調査を実施。

4月
～4月 18 日（土）
吉田構内新教育棟新営工事に伴う本発掘調査（吉田遺跡）終了
4/13（月）～24（土）
吉田構内東アジア研究科・経済学研究科新営工事に伴う予備発掘調査（吉田遺跡）を実施。

5月
5/7（木）・8（金）・11（月）・28（木）・29（金）
吉田構内動物医療センター改修工事（吉田遺跡）にて立会調査を実施。
5/12（火）・15（金）
吉田構内大学会館西側正門等改修（道路）工事（吉田遺跡）で立会調査を実施。
5/18（月）～6/5（金）
光構内教育学部附属光中学校改修工事（御手洗遺跡）に伴う本発掘調査を実施。


『謎の官衙～山口大学 1200 年の時空を超えて～』展示風景


吉田構内東アジア研究科・経済学研究科新営工事に伴う本発掘調査風景

季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信
第１７号
『てらこや埋文』2009　夏

編集・発行
山口大学埋蔵文化財資料館
〒753-8511　山口県山口市吉田 1677-1
【Tel/Fax】083-933-5035
【E-mail】yuam@yamaguchi-u.ac.jp
【HP】http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~yuam-w/Shiryoukan.home/

発行年月日　2009.8.31.

季刊 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第17号

Elementary Archaeological Report
てらこや埋文
2009年 夏

資料館『展示活動』近況報告！

埋蔵文化財資料館では、昭和 53 年（1978）の設立以来、所蔵されている本学構内遺跡と山口県内の主要遺跡出土品を用いた資料展示を開催してきました。山口県内の数少ない「埋蔵文化財・考古学資料」の展示施設として学内はもとより地域に皆さまにも長年にわたりご愛顧いただいており、当館一同心より感謝しています。

今後も、当館が所蔵している郷土山口県の特色ある歴史資料を用い様々な展示活動を行う所存ですが、新たな試みとして昨年度より『学内連携企画展』を開催しています。この企画は、本学に収集・所蔵されている様々な貴重学術資料を、「いつでも・誰でも・自由に・気軽に」見学できる学内唯一の展示施設『埋蔵文化財資料館』にて公開するというものです。ここでは、当館の展示活動近況をご紹介します。

第 27 回企画展「謎の官衙～山口大学 1200 年の時空を超えて～」

3 月 20 日（金）から 5 月 29 日（金）にかけて、本学吉田キャンパス出土資料を素材とした企画展を開催しました。当展示は、『山口お宝展』（山口市の貴重な歴史的・文化的遺産を公開するイベント：山口商工会議所・山口お宝展実行委員会主催）参加企画であり、会期中は学外からも多くのお客様を迎えることができました。

展示では、平成 20 年度の調査成果も踏まえ、吉田キャンパス南東部に金属鋳造を行う「古代官衙」が存在したと推定される根拠を、墨書土器、硯、服飾具、鋳造関係遺物などの実物資料を用いて示しました。

展示内容が極めて難解であったにもかかわらず、400 名を超える方々にご入館いただきました。アンケート調査では、「大学が遺跡の上にあるということに驚いた！」などの感想とともに、「山口と都とのつながり（交通や政治）」や「中世に関する調査成果」「奈良時代や平安時代の植物」「石器特集」などの企画展を開催して欲しいという要望も寄せられました。

埋蔵文化財資料館では、今後とも皆さんのご期待にそえるよう、様々な埋蔵文化財展示を開催する所存です。ご期待下さい！

『謎の官衙～山口大学 1200 年の時空を超えて～』展

学内連携企画展「鉱物・岩石七変化」開催中！

7 月 6 日（月）から、本学理学部地球圏システム科学科との連携により、加納隆教授が長年にわたり収集・研究を行なってきた鉱物と岩石の標本資料を展示しています。

展示の構成は、①石とは何か～「鉱物」と「岩石」との違い～ ②「鉱物」の様々な色と形　③「岩石」の様々な色と形　④本学理学部地球科学教室教員が南極観測隊に参加し、採取した南極の岩石資料　となっています。

私たちの身の回りには、実に様々な「石」が存在します。子どもの頃、学校帰りに石ころを蹴飛ばしながら歩きましたね。あの石ころと、大人になった私たちが有り難がって身に纏っている宝石と、何が異なっているのでしょうか。

私たちが専門とする考古学・埋蔵文化財調査においても、「石」は非常に近しい研究素材です。古の人々は、石を用いて様々な道具（石器）をつくり出し、その道具を用いて様々な活動を行っていました。また、古墳や建物基礎、灌漑施設などの構築物にも多様な石材が用いられています。今回の展示は、私たちとしても非常に興味深い内容となっています。

日頃目にすることが出来ない貴重な資料を数多く展示しています。会期は 10 月 2 日まで。まだご来館いただけていない方は是非一度足をお運び下さい。

（横山　成己）

『鉱物・岩石七変化』展ポスター

遺跡発見伝

やまぐち遺跡発見ものがたり　Vol. 2

このコーナーは、山口県内を代表する遺跡の発見経緯をご紹介します。今回紹介するのは美祢市秋芳町嘉万に所在する国秀遺跡です。平成4年（1992）に美祢市の史跡に指定され、『嘉万史跡公園』として整備されています。

国秀遺跡（嘉万史跡公園）

発見された古代工人の集落

国秀遺跡は、昭和62年（1987）と平成3年（1991）に実施された発掘調査により姿を現した、縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡です。中でも、古墳時代の終わり頃（6世紀）から奈良時代（8世紀）にかけて集落が安定して営まれていたようで、実に120棟もの竪穴住居跡が発見されています。

この時期の特徴は、冶金（やきん：鉱石などから金属を採取・精製・加工すること）を生業とした集団の存在が推定されることです。その証拠として、銅鉱石や鞴（ふいご）の羽口（はぐち）、銅や鉄のスラグなどが数多く出土しています。また注目されるのは、住居跡から統一新羅（しらぎ）系土器が出土していることです。7世紀の朝鮮半島で用いられた土器と共通する特徴を持つこの土器の出土は、当時の冶金技術に渡来人による指導があった可能性を強く示唆しています。

国秀遺跡の集落は、8世紀前半以降から縮小していきます。この時期は、遺跡の南東約8kmに位置する長登（ながのぼり）銅山が稼働を始める時期に一致します。国秀のムラで暮らしていた人々も長登の地に移り住み、冶金の腕を振るったのでしょう。

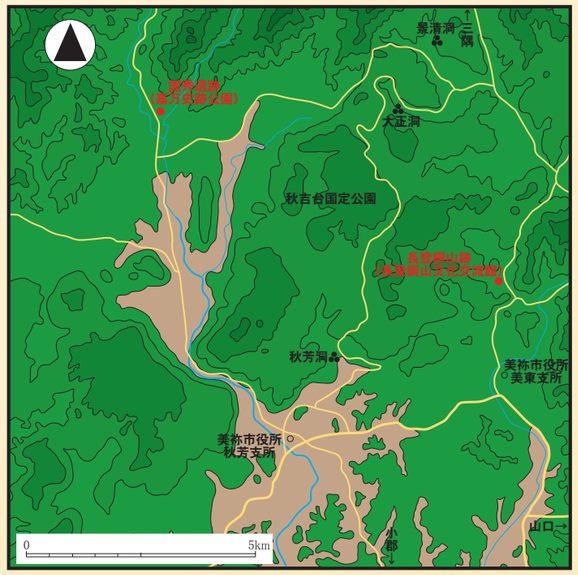
様々な工夫がこなされた史跡公園

現在遺跡地の一部は、遺構や建物などが復元され、『嘉万史跡公園』という名の野外学習広場となっています。下の写真のように、当時の生活が視覚的に理解できるよう、様々な工夫が行われています。また出土品の一部は、国指定史跡長登銅山跡に今春オープンした『長登銅山文化交流館』に展示中です。同時に見学すると遺跡への理解がより一層深まりますよ！

（横山　成己）

「史跡公園」として整備された国秀遺跡

統一新羅系土器のモニュメント



国秀遺跡・長登銅山跡案内図

復元炉と金属精錬・加工風景

復元竪穴住居内では古代の家族が生活している

お食事処まいぶん　vol. 5

古代の調理具　甑（こしき）

今回ご紹介するのは「甑（こしき）」という、古代の調理具です。山口県ではこれまでの発掘調査成果から、6世紀前半、古墳時代に広まったと考えられています。

甑は食物を蒸すための「蒸し器」で、底に大きな穴の空いた土器です。甑の登場により、この時代の人々の献立や調理方法は大きな広がりを見せます。このコーナーでは古代の人々の「食」の変化、そして実際に甑を使った調理方法をご紹介します。

「蒸す」調理法の登場

山口県では甑が登場する前の時代、弥生時代までは「煮炊き」などの調理方法が主流でした。これらの時代の調理方法は、簡素な造りの炉に火をおこし、その上に甕を置き煮炊きするという方法でした。それが6世紀前半、甑やカマドが本格的に広まり「蒸す」という調理方法が加わりました。それでは、甑は一体どうやって使用するのでしょうか？

甑を使って蒸す調理を行うには、図のようにまず水を入れた甕を置いて、お湯を沸かし蒸気を立たせます。その上に底に穴の空いた甑を置き、中にお米を入れて蒸します。そうすることで蒸し米ができます。甑にそのままお米を入れるとこぼれてしまうので、底にすのこを入れ、布などを敷き、お米を置いたのではないかと考えられています。

食物を煮たり焼いたりする調理が中心だったそれまでの生活に、蒸す調理方法が加わったことで人々の食生活は大きく変化し、より豊かな献立を得る事ができました。

弥生時代までの食卓風景

古墳時代の食卓風景

弥生時代までの調理例

食物を「煮炊き」したり、焼いたりする献立が中心でした

弥生時代の甕には、土器の器壁を薄くし煮沸の効率を上げるという工夫が見られます。

甑を使った調理例

・おこわ
・蒸し米を干した糒

など、蒸すことを必要とする献立が加わりました。
この「蒸す」技術は、現在の調理方法に通じるものがあります。

それでは次回は、実際に甑を使った調理風景をご紹介します！

（乃美友香）